

滋賀県平和祈念館 第19回企画展示

きたさとむら 野洲郡北里村 - 戦時下のムラの人と風景 -

(会期：平成30年1月7日～6月3日)

野洲郡北里村と呼ばれた地域は江頭村・十王町・小田村・野村・佐波江村の5つの大字からなっていて、現在は近江八幡市に属しています。水荃内湖のほとりから朝鮮人街道沿いに広がる北里村は、物流の中心として江頭湊がさかえ、水郷地帯には豊かな水田がひらかれていました。

この北里村の野村におられた晝田英杉(ひるた ひですぎ)さんは、昭和13年に日中戦争へ出征した人々の記念写真をはじめ、水郷の風景や戦時のようなすがすがしい生きいきとした写真を撮影されてきました。今回は晝田さんの写真を縦糸にして、戦時色におおわれてゆくムラの暮らしを紹介いたします。

最後にりましたが、今回の企画展示にご協力をいただきました晝田和子様、大谷利男様、木本 勇様、そして当館の取材にご協力いただきました県民のみなさまに、心よりお礼を申し上げます。

滋賀県平和祈念館 第19回企画展示
野洲郡北里村
戦時下のムラの人と風景

平成30年 1月7日回 - 6月3日回 (入館無料)

滋賀県平和祈念館
〒527-8157 滋賀県東近江郡野洲町131番地
TEL 0749-46-0350 FAX 0749-46-0350
E-mail hwa@pref.shiga.lg.jp

開館時間 / 午前9時30分～午後5時
休 業 日 / 月・火曜日(祝日にあたる場合は別案)
駐 車 場 / 約50台(無料)

写真：晝田英杉さん 撮影：高田洋子さん 編集：李白ゆき子 企画：野洲町民会館

野洲郡北里村 戦時下のムラの人と風景

野洲郡北里村と呼ばれた地域は江頭村・十王町・小田村・野村・佐波江村の5つの大字からなっていて、現在は近江八幡市に属しています。水荃内湖のほとりから朝鮮人街道沿いに広がる北里村は、物流の中心として江頭湊がさかえ、水郷地帯には豊かな水田がひらかれていました。

この北里村の野村におられた晝田英杉(ひるた ひですぎ)さんは、昭和13年に日中戦争へ出征した人々の記念写真をはじめ、水郷の風景や戦時のようなすがすがしい生きいきとした写真を撮影されてきました。今回は晝田さんの写真を縦糸にして、戦時色におおわれてゆくムラの暮らしを紹介いたします。

最後にりましたが、今回の企画展示にご協力をいただきました晝田和子様、大谷利男様、木本 勇様、そして当館の取材にご協力いただきました県民のみなさまに、心よりお礼を申し上げます。

滋賀県平和祈念館 第19回企画展示
野洲郡北里村
戦時下のムラの人と風景

平成30年1月13日(土)14:00～

【平和学習講座】
◆戦争遺跡分布調査報告会
●平成29年12月17日(日) / 「大津陸軍基地が語る兵士のすがた」辻川哲郎氏
●平成30年1月21日(日) / 「遺骨に語る日本陸海軍の施設」神保忠宏氏
●平成30年2月18日(土) / 「遺骨見聞戦争遺跡の調査から」中井 均氏
●「米原戦車遊撃隊の調査調査」杉山佳奈氏

【探訪】
「陸軍八日市飛行場と八日市の街」
平成30年3月21日(水・祝日) ※要申込、詳細未定

【開館6周年記念行事】
戦争体験を聞く会、ボランティア活動報告ほか
平成30年3月11日(日)

【戦争体験を聞く会】※毎月1回開催
戦争体験者の貴重な体験談を実際にお話いただけます

【映画上映会】※毎月1回開催
戦争をテーマにした国内外の名作を上映

【体験談に関して】
滋賀県平和祈念館では、国内外で戦争を経験した方の体験談を募集しています。対象は戦時体験者ではありません。また、滋賀県に在住して戦争体験者の方を募集しています。詳しくはお問い合わせください。

【資料寄贈に関して】
戦時下の貴重な資料、戦時によって得られた資料、戦争に関する書籍、写真等を寄贈していただける方を募集しています。戦争体験者やその人の体験が伝わるとありがたいです。寄贈は体験談と併せてです。また、高橋尚に「戦時体験者」の認定書、認定書、認定書等の資料、資料がなくても構いません。お気軽にお問い合わせください。

詳しくは「滋賀県平和祈念館」までお問い合わせください
TEL 0749-46-0350 FAX 0749-46-0350
E-mail hwa@pref.shiga.lg.jp

アクセス
●近江八幡山田川(山田)から徒歩約10分
●近江八幡市(山田)から徒歩約10分
●近江八幡市(山田)から徒歩約10分
●近江八幡市(山田)から徒歩約10分
●近江八幡市(山田)から徒歩約10分

チラシ表面

チラシ裏面

ごあいさつ

戦争当時、野洲郡北里村と呼ばれた村は、^{そがしら}江頭村・^{じゅうおうちゆう}十王町・小田村・野村・^{さばえ}佐波江村の5つの大字からなっていました。現在は近江八幡市に属しています。琵琶湖と水荃内湖のほとりから朝鮮人街道沿いにひろがる北里村には、縦横に水路がめぐる水郷地帯に豊かな水田が広がっていました。また、江頭村の水路のひとつには、水荃内湖から琵琶湖へぬける江頭湊がひらかれ、朝鮮人街道をとる陸上輸送とのあいだをつなぐ物流拠点としてさかえました。

この北里村の野村におられた晝田英杉(ひるた ひですぎ)さんは、戦時中の村のようすを撮影した多くの写真を残しておられました。晝田さんの写真には、昭和13年に日中戦争へ出征した村人とそのご家族の記念写真をはじめ、ムラの水郷風景や、しだいに戦時色が色濃くなってゆくようすが、生きいきととらえられています。

今回は晝田英杉さんが残された写真を縦糸にして、戦時色におおわれてゆくムラの暮らしを紹介いたします。最後にりましたが、今回の企画展示にご協力をいただきました晝田和子様、大谷利男様、木本 勇様、そして当館の取材にご協力いただきました県民のみなさまに、心よりお礼を申し上げます。

平成30年1月7日

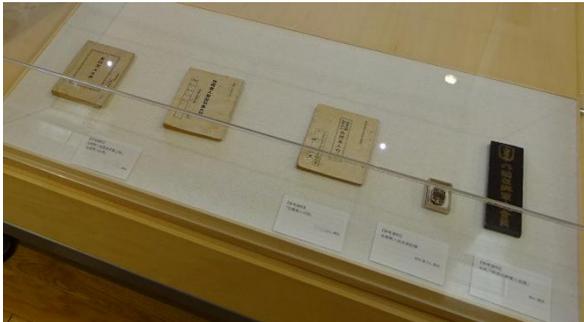
滋賀県平和祈念館



プロローグ 在郷軍人会とムラ

兵役を離れて帰郷した元兵士は、戦争がはじまると召集を受けて軍隊に戻ることになる予備役となります。これを在郷軍人と呼び、府県・市町村を単位とする在郷軍人会に組織されていました。

郷里では自身の召集にそなえるほか、徴兵検査や召集事務、青年学校などで行われる教練、防空訓練などへの協力・指導をとおして、軍部の意向を地域へ浸透させる役割の一部をはたしたといわれます。



【参考資料】左から「在郷軍人心得」、
「在郷軍人服役召集之葉」、「在郷軍人の葉」、
「在郷軍人会会員記章」、木札「帝国在郷軍人会員」

第1章 北里村の風景

北里村の沿革

江頭[えがしら]という村名には次のような伝承があります。天照大御神を伊勢へ遷した倭姫が、その途中、近江から美濃へ行く際に滞在した場所が江頭であるというものです。江頭から船で渡った先が尾江(現長浜市尾上[おのえ])。「江(湖)」の頭と尾というわけです。

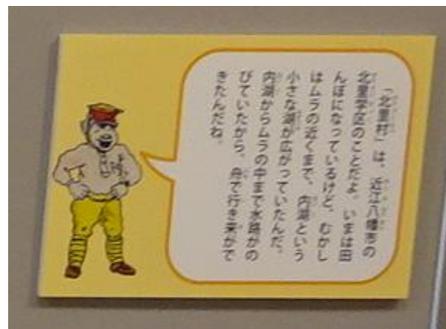
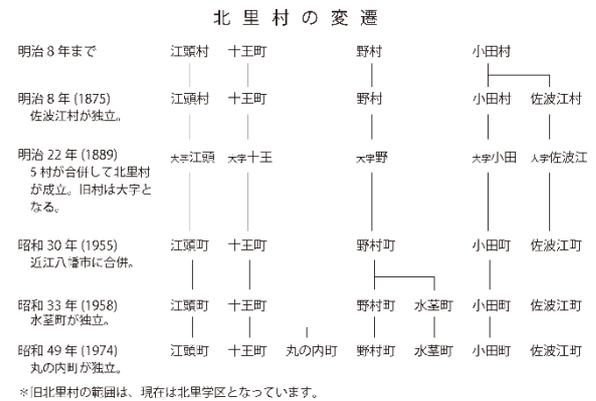
江頭・十王[じゅうおう]・小田の3村は古くは邇保郷、のちに邇保荘と呼ばれた加茂社の荘園でした。

「邇保[にほ]」の名は「鳥[に]おの湖」(琵琶湖)に由来し、日野川も「邇保川」と呼ばれていました。

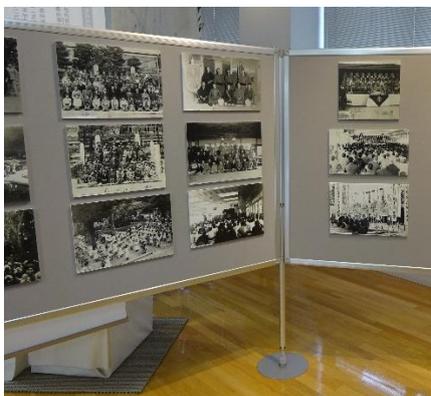
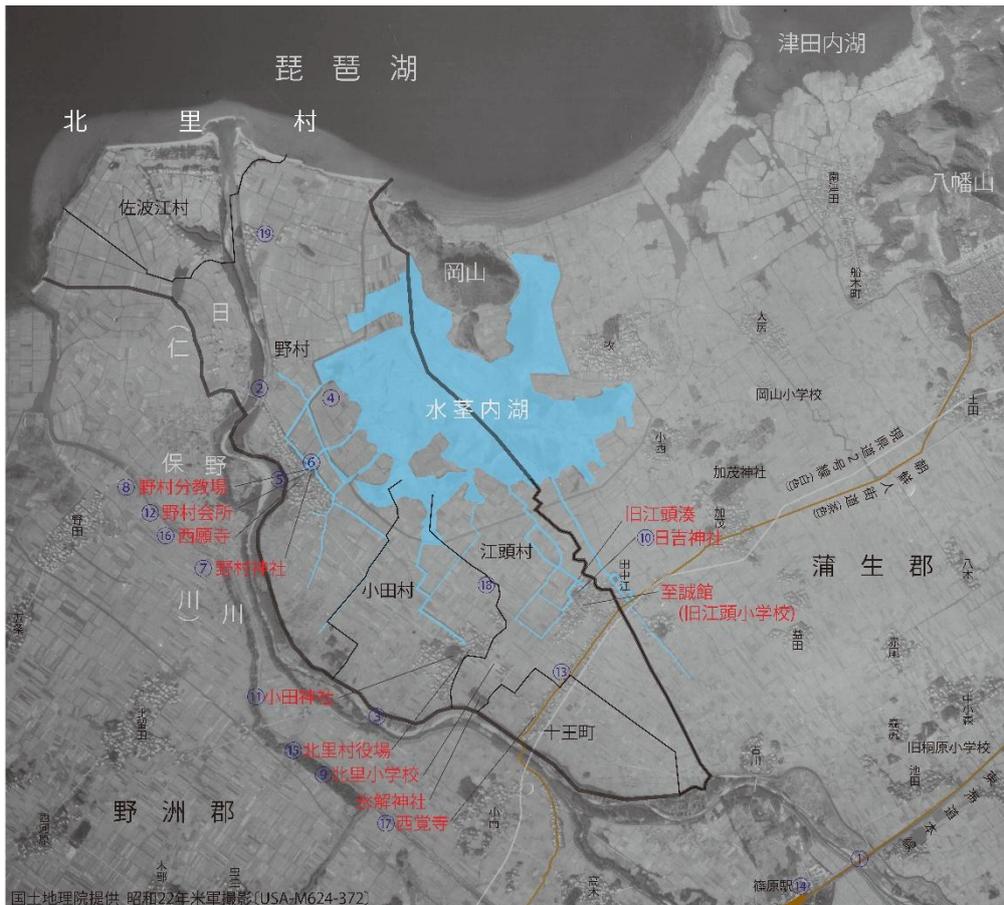
野村は遅くとも室町期までに開かれていた山門領。佐波江[さばえ]村は江戸期に開発された新田で、明治8年独立の新しい村です。

こうした深い歴史を反映して、北里村には小田神社楼門、大日如来坐像(もと十王町大日堂)、阿弥陀如来立像(野村西願寺)といった国・県指定の文化財が豊富です。江頭村には「邇保荘条里図」(室町時代)と朝鮮通信使に関する史料で知られる区有文書が残されています。

江頭・小田・野村はかつては水葦内湖と水路でつながり、湖上交通がさかえました。また、朝鮮人街道は家康の上洛道で朝鮮通信使も通った重要街道です。街道と湖上交通の結節点となる江頭村は物流の中継地としてさかえ、十王町とともに街道沿いで商業が盛んでした。戦前には「乙女カフェー」「東雲座(芝居小屋)」といった歓楽・遊興施設がなりたつほどでした。



「北里村」は、近江八幡市の北里学区のことだよ。いまは田んぼになっているけど、むかしはムラの近くまで、内湖という小さな湖が広がっていたんだ。内湖からムラの中まで水路がのびていたから、舟で行き来ができたんだね。



晝田和子さん提供写真

【水郷】

Uさん (十王町)

昔は田舟で8月1日に長命寺参りや。「千日参り」という伊崎の竿飛び (伊崎寺の行事) がある日や。舟にすき焼きのコンロや鍋積んで、交代で船頭さんが漕いで。長命寺まで、堀を渡って (水荃) 内湖へ出て、ほいで琵琶湖へ出たねん。十王町以外は全部舟運や。(農耕用の) 牛でも舟に積んで行かへった。

【むかしの江頭・十王町のようす】

Uさん (十王町)

北里村のなかでも江頭村と十王町の朝鮮人街道沿いは、物流のかなめであつたことから、多くの商店が集まる繁華街でもありました。十王町にお住いのUさんに当時のようすを語っていただきました。

【北里村の街】

江頭に東雲座 (のち江頭座) いうのがあつてね。乗合バスを運営してはる人がな、野洲から芝居小屋買うて江頭に建てはつたねん。そんなかには花道や仲見世いう商売屋も、何もかもあつたで。

「乙女カフェー」いうのもあつたな。キャバレー

や。出征するとなると、同級生やらが集まって送別会してらったねんな。私ら子どもやったで、東雲座で映画見に行くどんちゃん騒ぎしはった。ほれが帰ってきたときでも、まだやってはった。70年前にカフェーがあつたて、在所の人でもみな知らんてらるやろう。

十王町には堤防の下にニッキ水作ったはる家があつたねん。花見やら祭りで売ってはるやつ。ほのニッキ水のひょうたん形のビンを、溶かしたガラス吹いてつくってはった人もあつた。

ハシトメたらいうんはリンゴやらミカンやら売ってはって。オカノやいうんは料理屋やったんやわ。八幡から芸者衆が来て踊ったりして、そこでもどんちゃん騒ぎしてはった。

昔は綿の打ち直し、鞍掛作ってはる家やら、桶屋さんやらあつてな。いまでは、だいぶ商売が減りましたな。

【十王町の井戸】

堤防の下に親井戸いうて井戸があつたねんな。仁保川（日野川のこ）が枯れても伏流水で井戸水は湧いたわけ。それをコンクリの会所枡で分けるんやけど、昔は樽でこしらえたつた。十王町ではその水で（商品にする）豆腐こしらえたりコンニャクこしらえたり。煮炊きの水も風呂水も、みなその水つこてました。鉄気がなかったさけ、弁当箱でも白シャツでも（水で汚れることがなく）美しかった。

第2章 ひるたひですき 晝田英杉さんとご家族



晝田英杉さんの肖像

晝田英杉さんの写真

晝田英杉さんは野村のお住まいの和子さんのお父さまです。当時はまだ珍しいかったカメラを手にして、昭和13年の出征者とそのご家族の記念写真を中心に、北里村のようすを撮影しておられました。素人写真ながら撮影技術は的確で、多くの写真がブレやボケがなく、村人の表情をよくとらえています。

また、晝田さんの写真は村の行事や風景もとらえており、日付や記録が記されていることから、記録写真としても貴重です。和さんはこのアルバムを大切に保管しておられました。

晝田和子さんの遠縁にあたる晝田武彦さんは伯父の利秋・寛治・修さんの三兄弟が出征されています。3人の出征写真も英杉さんのアルバムに残されています。

晝田利秋さんは学校の先生をされていましたが応召し、昭和12年に陸軍少尉として満洲で亡くなっています。寛治さんと修さんは生還されました。



晝田和子さん提供写真

【野村分教場の入学記念写真】 Uさん（十王町）

北里小学校に入学するとな、江頭と十王町と小田は小田神社へ参るんや。ほと、修身の本を1人に1冊ずつお宮さんからくれはんねんや。昔は修身の科目があつたげな。

*左上の写真はUさんと同級で、野村におられた晝田和子さんが分教場に入学した時のもの。野村分教場から、隣接する野村神社へあがる石段にならんで撮影された。



晝田和子さんのお父さんが英杉さん。写真を撮った人だよ。外国のバイクにも乗っていて、新しいもの好きだったんだね。遠い親戚の晝田武彦さんちでは、お父さんとふたりのおじさんたちが、みんな戦争に行っていたんだ。



左：正装の晝田利秋さん（長男）とお父さんの七之助さん
右：晝田利秋さん 階級章は少尉 晝田和子さん提供



晝田利秋さんの刀緒（3本）

晝田武彦さんのおじさんの利秋さんは、学校の先生だったんだ。けれど、軍隊に入って、がんばってえらくなったんだ。写真でいっしょに写っているお父さんの顔が誇らし気だね。だけど、中国の戦争で亡くなってしまったんだよ。



晝田利秋さんの陸軍将校正帽・正装・正袴、陸軍中尉正肩章、飾帯、選番士官懸章、陸軍中尉肩章、シルクハット、マント、日の丸寄書きなど（【参考資料】編上靴）

【叔父 梅村末吉さんのこと】 Uさん（十王町）
Uさんの叔父末吉さんは大正7年生まれ。高等小学校卒業後、栗太農学校へ進学し、県庁へ就職すると東京事務所に勤務されました。東京で結婚されたあと応召し、昭和20年フィリピン方面へ移動中に船が撃沈されて亡くなりました。

末吉さんっていう叔父さんは、東京行く前は加茂町にいはったねん。おばあさんが野菜持っていけ、いうてな。私が学校から帰って自転車を持って行ったんです。

それから県庁へ勤めてな。東京の丸ビルの滋賀出張所にいやはったねん。ほらほんでに、ええ生活しとかはるわい。丸ビルで水洗便所使うてはんにやで。もうしょっちゅう叔父さんのとこへ電報送って、お金送ってもらた。わしにはな、三越たららのデパートのおもちゃやら本やらくれたりな。スチームボートいうてな、ガソリン入れて湯わかして走りよるおもちゃ。こんなん持ってらる人、ここらにいらへん。

ほんでに東京で所帯もってな。千葉県の人、パーマかけてらった。向こうも末っ子、こっちも末っ子。末吉さんは賢いでな。農学校出とかはるし、勉強も

よかったやろで。叔父さんも叔母さんも、ものすごく字が上手やった。2人でもらう月給でええ生活してらる。惚れたはれたで所帯持って、ほらいいべな。

けど、34歳でな戦死しはった。フィリピンのどやこうやで、輸送船で船もろとも沈んでらんにかや。



『野洲郡北里村農事調査書』

これは叔父さんが、高等小学校のあと農業学校の3年制のほうって書いてかはる。ほのときの北里村に男が700人たら、おなごな何人たら、お医者さんが何人とか。役場へ聞きに行ったりお寺さんへ行ったり、足運んどかはるんや。コンピューターで書いたみたいに上手な字書いてかはる。

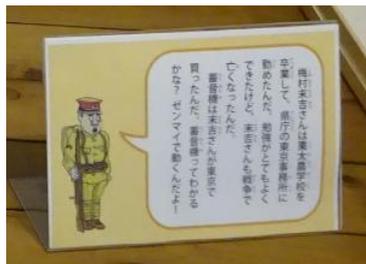
* 「2部第3学年」とあるので、17歳の時の作品。

裏表紙に「二等賞」とある。



ポータブル蓄音機、レコード

もともと末吉さんが昭和12~13年に買うとかはる。(戦後、Uさんが中学生のころに) 中学校の秋の運動会へ貸して、これで江州音頭たらレコードかけてみな稽古したねん。80年前のやで、ハイカラなもんやで。



梅村末吉さんは栗太農学校を卒業して、県庁の東京事務所に勤めたんだ。勉強がとてよくできたけど、末吉さんも戦争で亡くなったんだ。

蓄音機は末吉さんが東京で買ったんだ。蓄音機ってわかるかな？ ゼンマイで動くんだよ！

第3章 ムラのつながり



ムラのつながり

明治22年、江頭・十王町・小田・野村・佐波江の5村が合併して、行政単位として北里村ができました。5つの村は江戸時代までに成立した集落に由来し、合併のあとは大字となりました。大字は行政村の下の「区」という行政単位となり、その下には5~10軒からなる「組」が組織されました。

区や組は自治組織でしたが、戦争中は回覧板や定期的にかかれた常会をとおして、県・市町村の通知を行き渡らせる仕組みが強化されました。そのほか、勤労働員や防空活動、食糧や物資の供出・配給でも、区や組が単位となって実施されました。

こうした行政組織ばかりでなく、学校や、村を単位につくられた青年団や消防組、大日本国防婦人会のような民間団体・産業団体など、所属するさまざまな組織をとおして、人々は戦争完遂のために動員され、協力するよう組みこまれていたのです。

徴兵制度のもとで、ムラの人が軍隊に入ることは普通のことでした。兵役を終えて帰郷した在郷軍人は、ムラを戦争協力にみちびくリーダーとなりました。戦時にはふたたび召集されることになる彼らも、ムラでは普通の存在だったのです。

このような戦時下のムラで、人々は積極的に、あるいはやむなく、戦争を受け入れ、協力せざるをえませんでした。

国民学校・青年学校

戦前の尋常小学校・高等小学校は、昭和16年(1941年)に国民学校・高等科に改編されました。教育目的を「皇国民の基礎的錬成をなす」こととする、国家主義的色彩が強いものでした。青年学校は中学校に進学しなかった勤労青年の社会教育を目的として、昭和10年に制度化されました。昭和14年に義務化されて、軍事教練など軍人になるための基礎訓練が中心となりました。制服は襟章に特徴があります。北里村では国民学校の古い校舎を使っていました。



昭和10年ごろの北里小学校

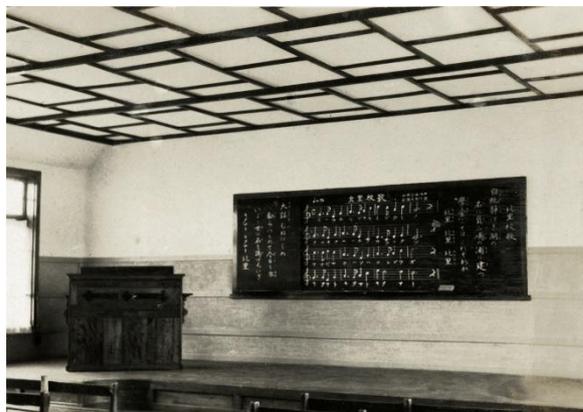
『近江八幡市立北里小学校創立百周年記念誌』より

【北里小学校】

Uさん (十王町)

素晴らしい小学校やった、北里小学校はモルタル張りの2階建てで。鉄板のフタがあって、そこへちり取りのゴミ捨てると、下にダーンと落ちるダストシュートというののがあった。1年生か2年生のときには、お弁当をぬくうする施設もあったんや。私らのころの北里小学校は忠魂碑のはたにあって、その跡地がいまの近江八幡市立看護学校や。みなが巻脚絆(ゲートル)つけて「勝ってくるぞと勇まし

く〜」って、歌いながら集団登校してた。江頭と十王町と小田の生徒は昼ご飯食べに家に帰ってた。



北里小学校音楽室

畫田和子さん提供

黒板に書かれているのは校歌。昭和10年11月。

【北里小学校音楽室】

Uさん (十王町)

音楽室は、小学校にしては北里と祇王[ぎおう](小学校)が立派やったんやな。2階のつきあたりにあったんやな。はたに聞こえるとあかんで。ほんでに(廊下の分だけ)おっきい部屋で、丸窓が一つあった。

【北里小学校の運動会】

Uさん (十王町)

運動場の向こうに見える杜が若松神社。後ろの山は岡山。右端に見えてるのが奉安殿で、その後ろは長命寺山。奉安殿のはたに二宮金次郎の石像があった。



北里小学校で運動会

畫田和子さん提供

【野村分教場】

Uさん (十王町)

北里村は金持ちやったさけ、野村に分教場があったねん。野村と佐波江は、1年生と2年生がここへ

かよって、3年生で(本校に)合流する。そやから、お弁当持っかよわはった。わしら江頭と十王町と小田の生徒は、昼ご飯食べに家に帰ってたけどな。佐波江あたりはワラ草履が減って1足が1日しかもたへん、ちゅわはんねん。7キロあるねんで、北里小学校まで。



野村分教場

『近江八幡市立北里小学校創立百周年記念誌』より



【参考資料】左：青年学校正帽・制服（襟章付き）、
 ケース内上段：「青年学校教練必携」、「青年学校手帳」、
 ケース内下段：「青年学校教科書」普通学科巻一・修身及
 公民科巻二、「総合青年学校教科書」、
 「青年学校教練教科書」上巻・下巻

戦争中に小学校からかわった国民学校では、「お国に忠誠をつくしなさい」と教えられたよ。進学しなかった人が仕事をしながら勉強した青年学校も、軍隊の訓練ばかりになったんだ。町内会も青年団も婦人会も、みんな戦争に協力しなければいけなくなってしまったんだよ。



北里小学校正門前の記念写真 晝田和子さん提供
 和子さんの卒業記念写真と推定されます。昭和21年3月。



【参考資料】白割ぼう着（現代）、大日本国防婦人会たすき、
 麻着物、かばん、警防団略帽・上着・階級章セット、
 「警防団幹部常会開催の件通知」・「警防団一般常会開催
 の件通知」



北里村大日本国防婦人会と校長・在郷軍人・江頭村長・助役
 北里小学校にて昭和17年1月撮影 晝田和子さん提供



パナー写真：北里村で結成された警防団 晝田和子さん提供
 ・警防団発会式、檀上は谷団長。小田神社にて、昭和14年？
 ・大東亜戦争一周年記念、野村会議所前、昭和17年12月
 ・北里村警防団幹部、後列右2人目は井狩村長。日吉神社にて、昭和17年8月
 ・野村警防団、会議所前、昭和16年1月。

第4章 出征



パナー写真：野村 三崎新一さんの出征 晝田和子さん提供

出征 一現役と召集一

晝田英杉さんが撮影された出征記念の写真は、撮影年月が書かれているかぎりでは昭和13年5月に集中しています。前年7月に日中戦争勃発、9月に国共合作、12月に南京占領と、日本は重慶に退いた国民党政府と長期的な全面戦争へ突入しており、これを受けて大規模な動員が実施されたのでしょうか。このころの出征では、祝いのぼりを立てて盛大に送り出しています。

撮影されたのぼりなどには「入営」「入団」「応召」「出征」の言葉が見えます。「入営」「入団」は徴兵検査を経て初めて軍隊に入る場合のことで、これを現役入隊といいます。入営は陸軍、入団は海軍です。

「応召」は召集に応じて軍隊に入ることです。「召集」の対象者は予備役の人ですから、徴兵検査のときにクジにもれて入隊しなかった人や、現役で2～3年の服役を終えて除隊・帰郷した人が対象になります。応召者の軍服の階級章が一等兵(星二つ)以上の人は、2度目の入隊者と考えられます。この戦争では2度、3度と入隊した人が珍しくありません。そして、応召を重ねるほど戦況の悪化がすすんでおり、運よく帰郷した人もあとの応召で命を落とす人が増えました。



晝田和子さん提供写真

【川端平逸さんの出征】

Uさん（十王町）

うちのお隣や。川端平逸さんてな。東洋レーヨン行ってはって、一人子やったねん。戦死しやはって。大文字屋いう旅館やってはったんや。日野川に橋がないときに川留めちゅうのがあって、行商してはる人らが泊まる商人宿やな。定かではないけど、堤康次郎が行商してらるときに、ここへ泊まっとかはるちゅうことや。

* 堤康次郎・・・滋賀県出身の実業家・政治家。西武グループの創始者。



出征 川端平逸さん（戦死） 昭和13年5月20日

晝田和子さん提供



赤たすき、千人針、日の丸寄書き



出征幟、除隊記念幟



中国と戦争がはじまったから、軍隊にたくさんの人を入隊させたんだ。ひさしぶりの大きな戦争だったからね。日本軍はそれまで負けたことがなかったし、がんばればすぐに勝てる、と思ってたんだ。だから、のほりを立てて盛大に見送りをしたんだね。

第5章 無言の帰還



葬儀の幟、柩掛け

無言の帰還

村をあげて、盛大に出征を見送った将兵たち。しかし、みなが元気な姿で帰ってきたわけではありません。

戦場で亡くなった方々は、遺骨となって村に帰ってきました。そして、北里小学校の講堂で村が主体となって村葬をとり行いました。村葬のようすをとらえた写真では、いずれでも複数の戦没者が祭壇にまつられています。戦闘の激しかった作戦では多くの戦没者が一度に生じたことや、船便などのつごうで複数の方の遺骨が一度に帰還した、などの事情があったのでしょう。

外地から帰ってきた遺骨は遺族が受け取り、自宅や寺まで親族が葬列をつくって運びました。そこでは簡略なお勤めですませ、後日何人かの戦没者をあわせて村葬を本葬としてとり行ったようです。写真や小学生だったUさんの証言からうかがえるように、多くの方が参列した葬列は、自宅から村葬場の講堂まで遺骨を運ぶときのものだったようです。

戦没者の帰還は終戦後も続きました。

北里小学校の卒業生名簿と北里学区の戦没者名簿をつきあわせてみると、戦没者は昭和6年～10年度の卒業者に多く、男性の4割が戦没された年度もありました。この戦争で亡くなった方の数はいかに多かったかを示す資料です。

戦争で亡くなった人は、骨だけになって村へ帰ってきたんだよ。国のために戦って亡くなったんだから、村でお葬式をやったんだね。戦争が激しくなると、一度にたくさんの方が遺骨になって帰ってきたんだ。

パナール写真：自宅での葬儀と村葬 晝田和子さん提供 (4枚)



自宅での葬儀の写真

撮影年不詳。「三崎順三家」のメモ書きがある。



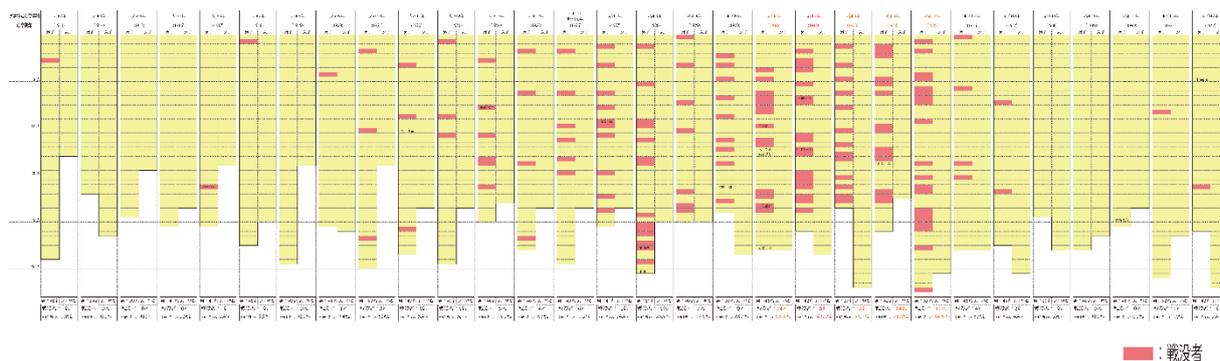
村葬会場（北里小学校か？）前、昭和12年撮影

左の幟に昭和12年に戦没された晝田利秋さんの名がみえる。



下2枚：北里小学校で行われた村葬の写真。撮影年不詳。

北里村 小学校卒業年次別 戦没者数



旧北里村の範囲を学区とする北里小学校の卒業者名簿から、日中戦争・太平洋戦争で亡くなった方を赤色で示しました。大正2年から昭和17年の卒業生のなかに戦没者がおられます。表には氏名を明示していませんが、本展示でご紹介した方や、畠田英杉さんの写真に見える方のお名前は明示しました。女性の戦没者はおられません。

これによると、昭和6年度から10年度の卒業生では男性の30%以上が戦争で亡くなっており、昭和7年度の卒業生では40%をこえていました。同年代男性の半数ちかくが亡くなっていたことになります。

なお、各年度の卒業生には、初等科と高等科の卒業生が混じっているので、同じ年度の卒業生は必ずしも同年生まれではありません。戦没者が30%をこえた年度の卒業生はおおよそ大正6年～12年生まれ、40%をこえた昭和7年度の卒業生はおおよそ大正7年～9年生まれの方です。

資料：『近江八幡市立北里小学校 創立百周年記念誌 北里』北里小学校百周年記念事業実行委員会 2005年
『終戦50年記念誌 勲光』近江八幡市遺族会 1997年

【村葬】

Kさん（十王町）

村葬は小学校の講堂でありました。ちょっと記憶が定かでないんですが、遺骨が帰ってきたときは家族が迎えに行かれましたね。喪主の方が白木の骨箱を持って、帰って来はっておうちへ納めて、父がお勤めに行ったことは覚えてます。ほんで、そういうのが何軒かあって、月に一度かどうだったか、村役場の方から何月何日に村葬いたしますということで、まとめて村葬をしはる。家々でお葬式いうんはないんですわね、遺骨が帰ってくるだけで。お葬式は村葬でしてくれはる。

北里村の住職はぜんぶ村葬に出てお勤めしたんですけど、宗派はばらばらですので、どの宗派でもできる共通のお経がなんか決まっていたらしいです。

ところが、一人だけ病死された方があって、村葬がなかったことがありましたな、憲兵が調べに来て。どういいきさつやったかはわかりませんが。

【村葬の行列】

Uさん（十王町）

あちこちから寄り合せて、15柱か20柱の合同葬式やな。お葬式を、小学校の雨天体操場とか講堂いうてた、ほこであったねん。ほのときに、「おまえ、小田の〇〇いう家いけ」いわれて、それで花輪やらもって学校まで行列すんのや。午後1時に（戦没者のお宅へ行って）行列してた。20柱やったら20軒、

小学生がお手伝いすんにやわ。



村葬へむかう葬列

畠田和子さん提供

小田神社前。背後の建物は北里村役場



村葬へむかう葬列 野村。昭和18年4月 畠田和子さん提供

豊郷町 北川儀一郎さんの葬儀

北川儀一郎さんは、昭和13年2月25日に中国の太原付近で戦死されました。甥にあたる富男さんのもとには儀一郎さんの戦死と葬儀に関する手紙や書類が残されていました。

- 昭和13年2月25日 北川儀一郎さん戦死
- 同 3月3日付 同僚より第一報。
中国の太原「西本願寺」に遺骨安置。
- 同 3月23日 戦死報道を見て、塚本さんが観音像送付。このころ仮葬儀か
- 同 4月12日 招魂社(現護国神社)慰霊祭
- 同 7月下旬? 遺骨の済南(山東省)到着を知らせる
同僚の手紙。
- 同 8月12日 村葬。



北川儀一郎さん葬儀関係資料、手紙等



第6章 戦争末期の北里村

戦争末期の出征

日中戦争のころには出征者を盛大に見送っていましたが、やがてこうした見送りはひかえられ、戦争末期には家族だけでひっそりと見送ったこともあったようです。軍隊の動員をかくすため、あるいは労力の合理化ともいわれます。

晝田英杉さんのアルバムには、戦争末ころの小田神社前の出征見送りの写真があります。小学生がラッパと太鼓で軍歌を演奏し、行列して見送ったそうです。沖縄に派遣された木本 勇さんが出征されたのは、こんな時期でした。



中国と戦争していたのに、アメリカとも戦争をはじめたから、日本はとても苦しくなってしまうんだ。戦争で亡くなる人もどんどん増えていったから、このころに軍隊へ入った人は、本当に死ぬことを覚悟したんだ。



兵隊送りの楽隊 小田神社前

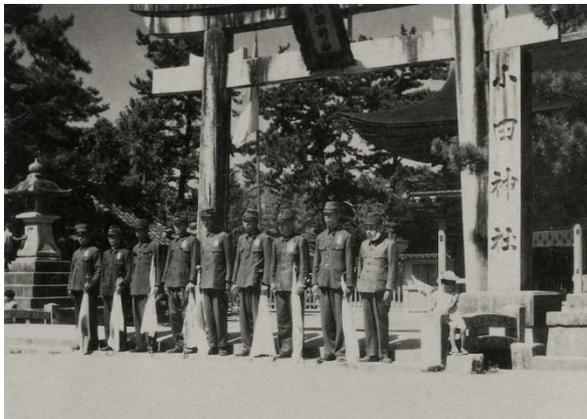
晝田和子さん提供

【兵隊送りのラッパ吹き】

Uさん (十王町)

兵隊送りの楽隊は小田神社の前の道で鳴らさばったんや、「勝ってくるぞと勇ましく〜」てな(『露営の歌』)。高等科の人がこれやらはって、昭和20年の時に小学校6年生やったわしは、まだできなんだ。

つぎのラッパ吹きはわしやて、先生が決めとかはあったねんけどなあ。楽隊した人には牛乳があたったんや。太田牧場（十王町にあった牧舎）でしぼらあった牛乳。太田牧場はいまでもあるねんで。



上下2枚：出征 小田神社前

畫田和子さん提供

【小田神社前の兵隊送り】 Uさん（十王町）

出征する前の日ぐらいに職員室にあいさつに来やはったわ。「私は出征になりました。篠原駅を何時何分の汽車に乗ります」いうて。兵隊送りの時間がありますやろ。

兵隊送りは3年生以上やったと思てます。小田神社の鳥居の前の太鼓橋のうで出征兵士があいさつしらって、村長さんが「ばんざーい」ちゅわはって。生徒みんなが授業ほってそこまで送りに行ったねん。篠原駅まで送りに行かはるのは青年団と青年学校のお方やったように思います。

【沖縄へ出征 摩文仁[まぶに]で終戦を迎えた】

木本 勇（野村）

野村にお住まいだった木本 勇さんは昭和19年に入営。沖縄に配置された部隊から司令部に抜擢されました。首里城地下壕からの撤退中、摩文仁での潜伏中、悲惨なようすを目にしておられます。

「患者を地下壕から陸軍病院へ搬送中、10人ほどの兵士と1人の少尉が爆撃を受けたところにてであった。少尉は軍刀を支えにして小岩に腰掛けたまま（多分休憩していたのだらう）、腹部をえぐられて死んでいた。そして、兵士1人が短剣を振り回して“助けてくれ”と叫んでいた。病院で看護婦にようすを伝えたが、”行けない、今はそれどころではない”と。病院も、このことばを納得せざるをえない状態にあったのである」

「（撤退中は）かくれられる壕やガマは兵士が占拠して、住民等が入っていれば追い出す。何回となくそんな場面にでくわしている。

摩文仁へ南下するとき、米軍の観測機が飛んでいた。前の道路を小隊が移動しているのに気がついて、“これは危険だ”と思って山陰にかくれた。すると、直後に迫撃砲が撃ち込まれた。すぐに移動して畑に伏せ、頭には吹っ飛んだヘルメットのかわりに水筒をかぶせていた。爆風で跳ね上がった土がいっぱい降りかかってくるのをこらえながら、やっと攻撃が終わって静かになって元に帰ってみると、小高い山は跡かたもなく平地のようになっていた」

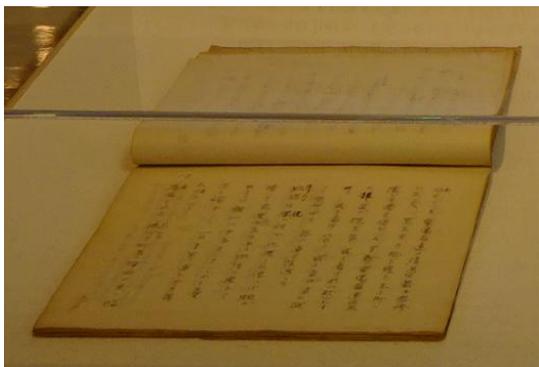
〔手記『沖縄戦追憶（補足）』より〕

摩文仁にはね、井戸がひとつでしたんやわ。そこしか水がないんですよ。私の壕からは100メートルぐらいあったかな。その道中ね、ほらもう足飛んだ人やら、身体が無茶苦茶になった人やらね。木にもぶら下がったるんです、手足が吹っ飛ばされて。ほんななかを井戸へ行くでしょう。井戸のまわりも死人でいっぱいでした。集まってきたところをやられたんでしょ。ひどいもんでしたわ。

潜伏中に負傷をして投降した木本さん。1年ほどの捕虜生活で傷をいやし、昭和21年11月に野村へ帰ってこられました。

家に帰って感動とか、そんなん別にね。迎えにも来てくれてませんしね。たくさん死人を見た関係で、

そういうことを感じなんだん違うかな。感情におぼれるような状態ではなかったですわね。



木本 勇さんの手記『沖繩戦追憶(補足)』



【水葦内湖干拓と勤労働員】

Uさん・Kさん（十王町）

滋賀県では 10 ヲ所の内湖で干拓工事に着工し、耕地を増やして食糧増産をはかりました。しかし農地を拓けたのはごく一部で、工事が完成したのは戦後でした。

北里小学校の2階の裁縫室に水口中学校の生徒が泊まって、水葦内湖の干拓の勤労働員をやったねん。昼は仕事して、夜は勉強。講堂には滋賀師範の生徒さんが寝泊まりしてらったな。

ほて、組ごとに風呂の当番があつて、あたらたら生徒さんが入りに来てはってん。食糧のないときやさげに、サツマイモやら野菜揚げたのをやってはった。ほいたら京都の岩倉の人がやはって、漫画とか少年倶楽部とかお古をくれはったわ。食糧ないときやでありがたかつたんやろうな。学校の先生は地主さんとこのええ風呂、みんなの家は桶風呂やわね。

【Uさん】

水葦内湖の干拓には天王寺の師範学校（大阪第一

師範学校）の人らが来て、西覚寺の本堂に寝泊まりしてはりました。私は宇治の火薬工場へ学徒動員で行ってましたから、日曜日に帰って寝泊まりしてる姿しか見てませんけど。

【Kさん】



上下2枚：北里小学校の農園

畫田和子さん提供

【学校農園】 Uさん・大谷利男さん（十王町）

学校でサツマイモ畑やらカボチャ畑やってるねん。これは太田源一校長先生（口ひげの人）。

【Uさん】

学校農園は正門の道を挟んで向かい側（南東側）にありました。

女の人は石橋こぎく先生（昭和19～21年在職、小田の人）。メガネの男の人は北村一男先生（昭和14～20年在職）。

【大谷利男さん】



上下2枚：米の供出 北里小学校正門前 晝田和子さん提供

食糧の増産・供出

北里小学校の本館前でたくさんの米俵とともに先生と生徒たちが写っています。右の建物は農具庫。ひげの先生は太田源一校長先生で、男子の写真の右端は織田龍洲先生。

学校田で収穫した米にしては多いので、供出の手伝いしたときの写真かもしれません。農家では、少なめに定められた自家米以外は、供出しなければなりませんでした。

「第四回野洲郡女子犁耕競技会々場」の碑を持つ男性を写した写真は、小田の北方で撮影されたものと思われます。女性に牛に犁を引かせる「牛耕」を競わせています。出征で青年男性がいなくなった農家で、不慣れな農作業を女性に習得させるために開催されたのでしょう。



皇紀二千六百年記念開墾地 野村 晝田和子さん提供



第四回野洲郡女子犁耕競技会 晝田和子さん提供



アメリカはとうとう飛行機で日本本土を攻めてきたんだ。それくらい、日本軍は負けていたんだね。

北里村のちかくでも攻撃を受けて、日本の飛行機が撃ち落とされたんだ。住民にも亡くなったり、大けがをした人がでたんだよ。

あやめはま 【菖蒲浜の空襲】

Tさんほか

昭和20年8月、突然米軍艦載機十数機が菖蒲浜を

空襲しました。当時、菖蒲浜には大津の天虎飛行場の分所があり、5機の水上飛行機で学徒兵が特攻訓練を行っていました。空襲はこの飛行機をねらったものでした。

昭和18年に天虎航空隊が来ましたんや。いまの公民館（菖蒲自治会館）があるところに中洲小学校の分教場がありましたんや。それが本部ですわな。私ら小学生10人ほどは行けといわれて、（整備の）手伝いに来てたんです。搭乗員は特攻隊員で、沖島めがけて突撃の訓練してはりました。飛行機は2枚羽根の水上飛行機。浜に編んで作ったみざらにおいて、そこへフロート上げて引っ張り上げるんです。ほて、松林の中へ隠してあった。

8月13日の10時ごろ、10機ぐらいのグラマンがやってきて、機銃掃射をやり倒しよった。私ら墓地へ隠れて、特攻隊の人らがかぶさって抱えてくれたんです。ほら、ものすごい。集落の家の屋根は、みな瓦突き破って穴あいたし、松の幹にも穴があいたった。砂地で防空壕掘れへんから、座敷のまん中で布団かぶってうずくまっていた、いうてらったもん。須原で一人亡くならはったしな、応戦した日本の飛行機が、やられよって立田へ落ちよった。

〔野洲市吉川のTさん〕

大阪から井口の親元へ疎開してきててな、20年の夏休みに菖蒲浜へ泳ぎに行ってたんや、姉と友だちと。そしたら空襲が来よって、おいてあった天虎の飛行機めがけてな。兵隊さんが「早よ、逃げよ」いわはって、松林へ走って逃げたがな。途中で「伏せよ」とか「走れ」とかいわはんのにしたごうて、伏せたときにパンパン、て弾落ちる音きいたもん。そなんしながら、水着のまま着替え抱えて、分教場までダークって逃げたわ。

〔野洲市井口にいた伊庭富美子さん〕

野村のDさんは当時3歳。座敷で友人と話をしていた祖父の卯之助さんのひざのうえに抱えられていたところ、突然機関銃の弾が屋根を突き破って卯之助さんの右足付け根にあたり、瀕死の重傷を負われました。さいわいDさんには、かすり傷一つありませんでした。

やはり、野村におられたSさんは近くの池で遊んでいたところ、交戦していた日本の練習機が墜落し、

日野川の東にあった自宅の隣の蔵に激突して炎上した、と父から知らされました。なお、空襲の日は8月14日だったという話もあります。



戦争が激しくなると、兵器の材料にするために、金ぞくでできたものなら、お寺の鐘や家庭用品でも供出したんだ。

お寺の人たちは、心の中で泣きながら鐘を送り出したんだよ。



大東亜戦争に因り鐘供出を図る檀家一同

野村西願寺、昭和17年12月8日

畫田和子さん提供

〔梵鐘供出 西覚寺〕

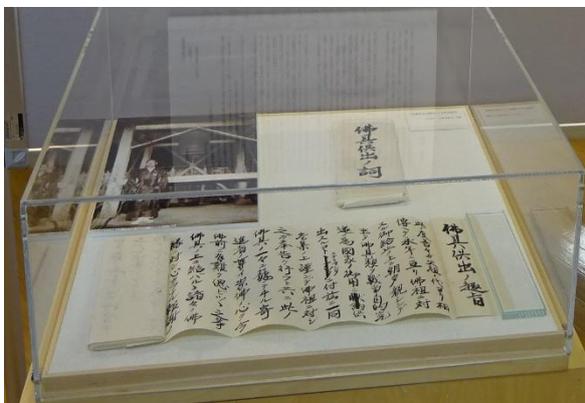
Kさん

以前から金属製の家庭用品などを兵器製造のために供出するよう要請されていたのが、昭和17年12月にいっきに強化され、お寺の釣鐘や仏具も供出しなければならなくなりました。

そのときのことは、学校であちこち行ったり、勉強やめて田植えしたり、働くのばかりであまり知らないんですけど、鐘がなくなった先々代の住職の心の中は寂しいちゅう想いやったと思います。供出さ

れたときには、尼講さんという、お年寄りのおばあさんたちに泣いたりされた方がいた、ということです。半鐘、鈴、焼香台とか香炉とか花筒とか、全部持っていかれて。代わりに陶器の燭台や香炉台や花瓶を持って来やりましたが、国から来たのか檀家さんが買って来てはったのか、子どもでしたからそのへんは定かやないんです。それは終戦後もずっと使ってきました。

何年のことやったか忘れたけど供出のまえから、戦争が激しくなると、鐘突くのやめなさいと。空襲警報のときはゴンゴンついて知らせんならんから、普段はもう突くな、ということをいわれました。



「仏具供出の趣旨」



掛軸「海行かば」

左端の掛軸は写真提供者の晝田和子さんによる平和を祈念する書「海行かば」です。

【日野川鉄橋】

Uさん（十王町）

私らは小さいときから日野川ちゆうなこといわへんだ。「仁保川」いいますにや。東海道日野川鉄橋の脚にも「仁保川鉄橋」と書いてあるんやな。12～13年前に河川改修で新しい仁保川橋（県道）ができたとき、川端のおばあさんが毛筆で「仁保橋」て書かへったのが欄干の銘板になったあるにやわ。



「仁保川鉄橋」と書かれていたという現在の日野川鉄橋

当館撮影

【木炭バス】

Uさん（十王町）

江頭から篠原駅まではバスがかよてたねん。「乗合自動車」と書いてあった。江頭の四つ辻（旧朝鮮人街道の交差点、県道江頭町西交差点の一筋西）にバスの待合所があったねん。

ほいで、江頭から十王へ来て仁保の坂越えんならんわな（日野川堤防を斜めに上がる坂）。当時はガソリンやあらへん、木炭バスやさかいこのぼれへん。ほと、(運転手が)「ぼんよ、おまえら駅まで乗せたるわ」ちゆうて5、6人が後ろから押してやるねん。

この坂は大八車や乗合自動車が止まれんで、下の家のひさしや樋、よう傷めたりしたな。

平和になったいまの北里村。戦争があったのは七〇～八〇年前のことだよ。八〇歳以上のお年寄りは、みんな戦争を知っているんだ。そういうお年寄りがみぢかにいたら、すこしおはなしを聞いてみよう。

第19回企画展示「野洲郡北里村一戦時下のムラの人と風景」(会期:平成30年1月7日～6月3日) 展示資料一覧

No.	資料名	点数	資料説明	提供者名
プロローグ 在郷軍人とムラ				
1	「在郷軍人心得」	1		田村 栄さん提供
2	「在郷軍人服役召集之菜」	1		田村 栄さん提供
3	「在郷軍人の菜」	1		個人提供
4	在郷軍人会会員記章	1		個人提供
5	木札「帝国在郷軍人会員」	1		個人提供
第1章 北里村の風景				
第2章 晝田英杉さんとご家族				
6	晝田英杉さんの肖像	1		晝田和子さん所蔵
7	陸軍将校正装	1	晝田利秋さん関係資料	晝田武彦さん提供
8	陸軍将校正袴	1	晝田利秋さん関係資料	晝田武彦さん提供
9	陸軍将校正帽	1	晝田利秋さん関係資料	晝田武彦さん提供
10	陸軍将校正帽前立て	1	晝田利秋さん関係資料	晝田武彦さん提供
11	飾帯	1	晝田利秋さん関係資料	晝田武彦さん提供
12	陸軍中尉正肩章	一式	晝田利秋さん関係資料	晝田武彦さん提供
13	陸軍中尉肩章	一式	晝田利秋さん関係資料	晝田武彦さん提供
14	刀緒	3	晝田利秋さん関係資料	晝田武彦さん提供
15	週番士官懸章	1	晝田利秋さん関係資料	晝田武彦さん提供
16	日の丸寄書き	1	晝田利秋さん関係資料	晝田武彦さん提供
17	将校用編上靴	1		個人提供
18	マント	1	晝田利秋さん関係資料	晝田武彦さん提供
19	シルクハット	1	晝田利秋さん関係資料	晝田武彦さん提供
20	「野洲郡北里村農事調査書」	1	梅村末吉さん関係資料	個人所蔵
21	ポータブル蓄音機	1	梅村末吉さん関係資料	個人提供
22	レコード	2	梅村末吉さん関係資料	個人提供
第3章 ムラのつながり				
23	青年学校制服 襟章付き	1		奥島すみ子さん提供
24	青年学校正帽	1		滋賀県
25	青年学校教練必携	1		奥島すみ子さん提供
26	青年学校手帳	1		滋賀県
27	青年学校教科書 普通学科巻一	1		個人提供
28	青年学校教科書 修身及公民科巻二	1		個人提供
29	総合青年学校教科書	1		滋賀県
30	青年学校教練教科書 上巻・下巻	2		北川麗三さん提供
31	白割ぼう着	1	現代	個人所蔵
32	大日本国防婦人会たすき	1		個人提供
33	麻着物	1		個人提供
34	かばん	1		個人提供
35	警防団上着	1		個人提供
36	警防団略帽	1		個人提供
37	「警防団幹部常会開催の件通知」	1	豊椋村	個人提供
38	「警防団一般常会開催の件通知」	1	豊椋村	個人提供
39	警防団階級章セット	一式		個人提供

第4章 出征			
40	赤たすき	1	個人提供
41	千人針	1	個人提供
42	日の丸寄書き	1 晝田 修さん	晝田武彦さん提供
43	出征幟「平田信一君」	1	平田正二さん提供
44	出征幟「中川与一君」	1	個人提供
45	出征幟「奥島宗男君」	1	奥島すみ子さん提供
46	出征幟「陸軍歩兵 中川太彦君 萬歳」	1	個人提供
47	出征幟「奥島義治君」	1	奥島すみ子さん提供
48	出征幟「太田正二郎君」	1	太田久彦さん提供
49	出征幟「泉恭英先生万歳」	1	泉 英千代さん提供
50	出征幟「小田融君」	1	個人提供
51	出征幟「堀井初太郎君」	1	堀井吉晴さん提供
52	出征幟「小林育三郎君」	1	小林幸子さん提供
53	除隊記念幟「堤金二君」	1	個人提供
54	出征幟「勝見益治郎君」	1	勝見一恵さん提供
55	出征幟「野田信次君萬歳」	1	野田富美栄さん提供
56	出征幟「田原麟太郎君」	1	個人提供
第5章 無言の帰還			
57	葬儀の幟「故海軍一等水兵 塚本善一之霊」	1	塚本次郎さん提供
58	柩掛け「陸軍工兵伍長 川村惣藤次之霊柩」	1	川村はつさん提供
59	観音像 塚本源三郎さんから送付されたもの	1 北川儀一郎さん葬儀関係資料	北川富男さん提供
60	弔辞 陸軍大将伯爵 寺内壽一 昭和13年8月12日	1 北川儀一郎さん葬儀関係資料	北川富男さん提供
61	天皇皇后両陛下祭塗料	1 北川儀一郎さん葬儀関係資料	北川富男さん提供
62	北川儀一郎さん葬儀関係資料	一式	北川富男さん提供
63	手紙等	一式 昭和13年	北川富男さん提供
第6章 戦争末期の北里村			
64	手記「沖縄戦記」	1	木本 勇さん提供
65	「仏具供出の趣旨」	1	個人所蔵
66	掛軸「海行かば」	1 晝田和子書	晝田和子さん所蔵

※令和8年3月編集